

朝鮮書籍目錄

珍書づくし

先きに最新式の「鮮林」を出版して好評を得し、今度其増補と共に新編を加へ近々公にせんとしつゝある旨語學者金澤博士は、内地人が朝鮮研究の最も必要なるにも拘らず、我が邦には未だ巴里東洋語學校出版の朝鮮書籍目録の如き立派なものなきを遺憾とし、十餘年間の苦心を積み巨財を投じて集め得た朝鮮本百十種の珍書を史、地誌、言語、文學、宗教、技藝、雜書の七類に分け寫眞や説明文を附し、私印として出版し、博士とせず為學者に頒つた。

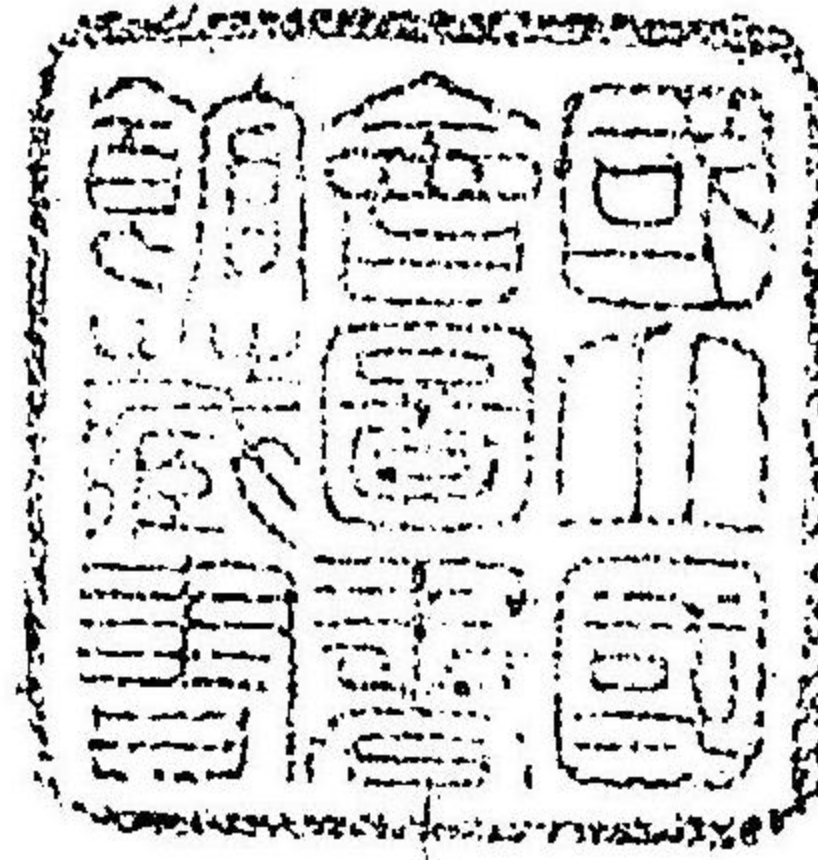


外國語學校の閣下に陳列して、日尚卒業式参列諸氏の展覽に供した。何れも珍貴なりだが中にも天下一品の朝鮮文字が梵字から脱化したもの佛徒の手で作成された聖蹟となるべき「佛頂心陀羅尼經諸真言集」朝鮮史の原景たる「三國史記」「高麗史」「東國史略」及び「立朝始末記」寫本「増補山林經濟」皇極一元圖「等々其他何れも垂涎すべきもの計だ。

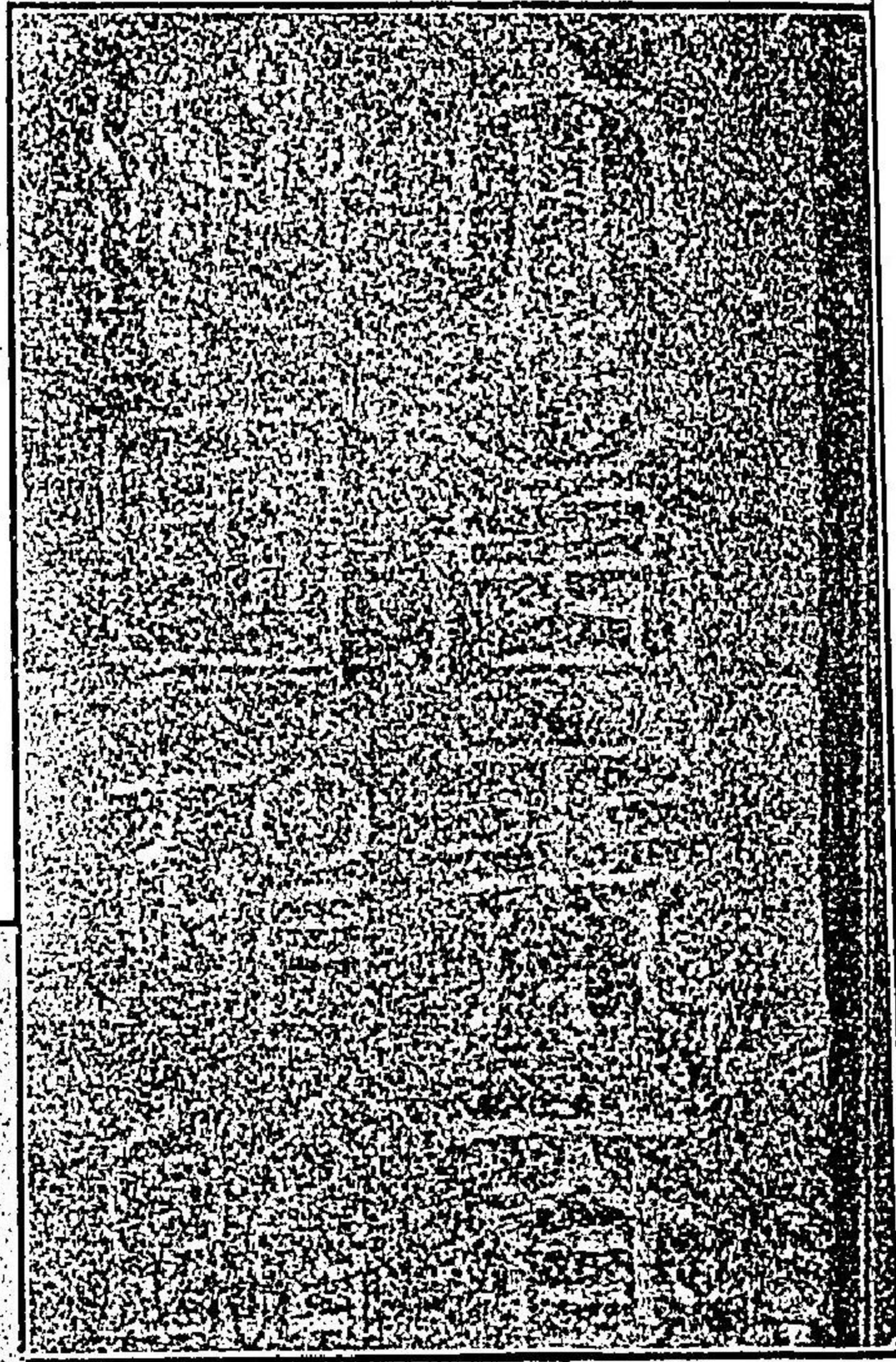
朝鮮圖書陳列

比較言語學者として特に朝鮮語に精通せる文學博士金澤庄三郎氏は自己の蒐藏に係る朝鮮圖書百十部四百六十五冊（内四十部は寫本にして希覯の珍書は多く此内に在り）を昨廿七日午後外國語學校卒業式後校内の一室に陳列して來賓及び知人の面々へ披閱せしめ同時に解題並に版式を示したる目録を公けにし我邦に於て最も朝鮮圖書の蒐藏に富めるは南滿鐵道會社の調査部なるべく其蒐藏は李王の内府奎章閣以上なりと稱せらるれを一人としての蒐藏は金澤博士を推さねばなるまい朝鮮研究の最も必要なる今日に於て從來朝鮮人の手に成りたる圖書に如何なるものがあるかを知らしむるため詳かに之を解題したる朝鮮圖書目録の編纂は極めて急要だが今日迄は誰も之を企てる者なく總に徳川時代に成れる伊藤東涯の朝鮮學などを頼りとするに過ぎなかつた此點に於て金澤博士の今回の舉は多とすべし價值がある尤も佛國巴里東洋語學校の出版に係るコーラン氏編の朝鮮圖書目録は四卷一千六百頁の大冊にして古今の圖書無慮三千八百部を解題したるものだが爲學なる専門研究者の外には其書名を知る者あるまい扱陳列せられたる圖書は史類地誌類言語類文集類宗教類叢書類雜書類の諸方面に亘つて居つたが其中龍蛇日録、控干録の如きは奎章閣にも存せざる珍本であつて豊太閤壬申役の史料として貴重なるものであり捷解新語、倭語類解の如き朝鮮人の日本語學教本は最も吾々に異様の感を惹かしめた又海東樂府や東國樂府は朝鮮の史詩にして頼山陽が日本樂府は後れ馳せに此を真似たに過ないのを見出した序に言ふ金澤博士は自己の遺著を傾けたる「四十四年間」と題する書を頃日脱稿し書肆三省堂をして出版せしむる事になつて居るさうだ（編者）

025, 21
Ka 373c



蘇定方塔



蘇定方平百濟塔在扶餘權懷素學士書
唐學士賀逢良唐高宗顯中慶五年庚立



225544

水國春光動、天涯客未行、草連千里綠、月共兩鄉明、
遊說黃金盡、思歸白髮生、男子四方志、不獨爲功名、

鄭圃隱

朝鮮の書籍目録として最も完備せるものは Maurice Courant 氏の *Bibliographie Coreenne*(1895—1901)なり。巴里東洋語學校の出版にかゝる四卷一千六百頁の大冊にして、古今の圖書を解説すること無慮三千八百部。著者の勤勞を多とすべきは勿論なれども、極東に關する此種の著作をも保護することの厚き彼地の學風を想へば、轉羨望の念に堪へざるなり。

然るに我國に於ては、伊藤東涯の韓籍彙など、徳川時代にこそあれ、明治の著作としては吾人いまだこれを知らず。強て求むれば、曩に日本文庫協會の主催せる第二回圖書展覽會の朝鮮本目錄數葉あるのみ。朝鮮の研究最も必要なる今日、書籍目録編纂

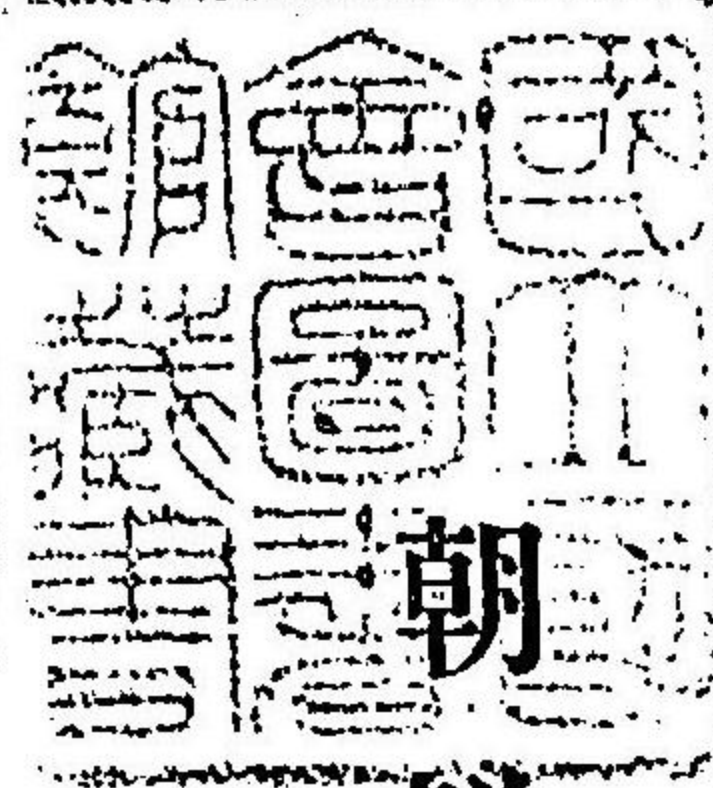
の如きも亦適切なる事業の一なれども、左右の事情は容易に吾人の希望を容れざるものあり。即ち自力の範圍に於て自己の最善を盡さんと欲し、茲に所藏の朝鮮本のみを編成し、私版として上梓するに至れり。叢爾たる小冊子なりといへども、朝鮮本に關する消息の一斑を傳へ得べくんば幸なり。

明治四十四年三月

金澤庄三郎

次 目	
史類	一
地誌類	二
言語類	三
文集類	四
宗教類	五
叢書類	六
雜書類	七

修天時和倉庫充實人民敬讓自辰韓遺民以
 至下韓樂浪倭人無不畏懷而吾王謙虛遣下
 臣修聘可謂過於禮矣而大王赫怒劫之以兵
 是何意耶王憤欲殺之左右諫止乃許歸前此
 中國之人苦秦亂東來者衆多處馬韓東與辰
 韓雜居至是寢盛故馬韓忌之有責焉鞞公者
 未詳其族姓本倭人初以鞞繫腰度海而來故
 稱鞞公
 三十九年馬韓王薨或說上曰西韓王前辱我
 使今當其喪征之其國不遠乎也上曰幸人之



朝鮮書籍目錄

史 類

1 三 國 史 記

八册

版本

金 富 軾

高麗仁宗王のとき文武の名臣金富軾が王命を奉じて撰びし新羅高句麗百濟三國の記傳牒の歴史にして五十卷あり。支那史籍より撮拾せる記事甚だ多く徐居世の如きも既に之を貶し居れど三國の事蹟を傳ふるは此書と三國遺事との存するのみなるを以て頗る貴重なり。本書は太祖三年甲戌(1394 A.D.)刊行の跋文を載すと雖英祖(1725 A.D.)頃の刊行本なるべし。從來我國にては刊本一部前田家に藏せられしのみにて近衛本毛利本神田本皆寫本なるが上是等は名家の秘藏に係り世上學者の容易に手にするを得ざる稀貴の書なりしが明治三十四年予が京城に於て本書を得しより以後朝鮮に於て兩三種の刊本發見せられたり。

世家卷第三

高麗史三

正憲大夫曹判書集賢殿大提學知經筵春秋館事兼成均大司



教修

成宗

成宗康威章憲文懿大王諱治字溫古戴宗
第二子母曰宣義太后柳氏先宗十一年庚
申十二月辛卯生景宗六年七月甲辰受內
禪即位 八月癸未御威鳳樓大赦陞文武
官一階 冬十一月丁酉追諡先考遂諡陵

高麗史卷三

2 高麗史

七十册

寫本

李朝世宗王が鄭麟趾等に命じて撰ばしめ、文宗王元年(1456)に成りたる紀傳體の高麗朝の史書なり。世家四十六卷、志三十九卷、表二卷、傳五十卷、目錄二卷、通計一百三十九卷あり。今や高麗時代の史籍殆ど皆湮滅せるを以て、此時代の歴史は本書を中心とし、東文選其他二三の書によりて研究せざるべからず。本書には曲筆あり、又記事蕪雜なりと雖、其蕪雜なるは原史料を其まゝ収録せしに因るを以て、却て價值あり。

3 東國史畧

一册

寫本

明宗王の儒臣柳希齡の著と傳へられ、十三卷あり。半島の略史にして、檀君より高麗朝末までを編年牒に誌し、記事簡潔にして要を得たり。我が昌平校は明板の書を得て翻刻し、朝鮮史略と題せり。此冊子は寫本にして、高麗仁宗王までの記事あるのみ。

4 燃藜室記述

貳拾登册

自初卷至宣祖朝
外一卷 顯宗朝

李朝建國より顯宗王に至るまでの紀事本末牀の史籍にして、約五百の史籍文集、金石文等より資料を類蒐し、其出典を注して排列し、尙ほ後人の添書の便を計り空白を置けり。而して撰者の意見は一も之を誌さず。本書は此種の史籍中、最も完全なるものとして名あり。燃藜室は編者の書齋の號なり。正祖王代の人なるが如きも其誰人なるかは未だ定説なし。此書もと稿本にして、寫本を以て傳るが故に諸種の別本あり、卷數も一定せずと雖、三十三卷に分つを普通とす。他に綴當七卷、顯宗別集十九卷、制度典故を誌せり

5 東國歷代總目

一册

寫本

肅宗王三十一年(1705 A.D.)洪萬宗が撰びし書にして、明人所撰の歷代總目に倣ひ、其材料を東國通鑑三國遺事高麗史國朝寶鑑政事撮要より採りて編纂せし、檀君より李朝顯宗王に至るまでの簡單なる編年史なり。記事頗る要を得、稍詳細なる年表に類し、便利なる書なり。卷末に地誌を附せり。

4 燃藜室記述

燃藜室記述卷之五

世祖朝故事本末

世祖

世祖忠莊承天體道烈文英武至德隆功聖神明睿欽肅仁

孝大王諱瑊字粹之 世宗第二子 昭憲王后以永樂十

五年丁酉太宗十七年九月二十九日丙子誕于本宮宣德三年

戊申世宗十年初封晉平大君後改咸平又改晉陽又改首陽大

君景泰六年乙亥閏六月十一日受禪八年丁丑上尊號承

天體道烈文英武成化四年戊子九月七日傳位于 睿宗

八月甲子昇遐于壽康宮今昌慶宮之正殿在位十四年壽五十



6 濬源系譜紀略

一册

版本

李氏王室の畧系譜にして、先王二十九年壬辰(明治三十五年)重校補刊せしものなり。近年更に補刊し英宗を英祖、正宗を正祖と改めし等二三の改定をなせり。

7 朝野紀聞

七册(三册缺) 寫本

徐文重

李朝に於ける有名なる史籍にして、國初より仁祖王に至るまでの大事を記せる記事本末跡の史書なり。徐文重は名臣録の著者として有名なる金堉孝宗王の外孫にして、其家もまた名門、肅宗王の時相臣となれり。本書は有力なる史籍として重んぜらる。

8 莊陵誌

四卷 二册 版本

莊陵は端宗王の陵號なり。本書は端宗王の事蹟、陵墓祭祀及び其忠臣の事蹟を輯録せるものなり。初め顯宗王の時、掌令尹舜舉深く魯山君を悼み、其遜位前後の事蹟と陵墓祭享の節とを約四十種の史籍より収録し、魯陵志二卷を撰びし、忌諱ありて刊行すること能はず、志ある者傳寫したりしに、肅宗王の時、魯山君は端宗の尊號を贈られ、陵を莊陵と號し、王位に列せらるゝに至りしかば、領相崔錫鼎等安東の人權和に囑し、魯陵志を考證し、且つ端宗王復位の事及六臣建祠復官の顛末を輯せしめ、之を續編とし、合せて莊陵志と名づけたり。これ即本書にして、六臣の一人朴彭年の後裔朴慶餘資を出し、肅宗王三十五年己丑(1709 A.D.)の頃これを刊行せり。本書四卷あり。初め二卷は尹氏の舊誌を權和の考證せるもの、卷三卷四は續志にして、權氏の續輯せしものなり。本書は有力なる史籍として諸書に引用せらる。

9 龍蛇日録

一册

寫本

宣祖王の壬辰役に於ける文書を蒐輯せるものにして、極めて貴重なる史料とす。之を諸方面より研究するに、本書は日本軍半島に侵寇の當時、慶尙道監司たりし金晬もしくは其家人の手に成りしものなるべく、先づ慶尙道に於ける當時の情狀を王廷に報告せる啓文の謄本數通を録せるが、此啓文は諸種の理由よりして金晬のものとして決定しうべし。次に王の諭告文、金誠一より左兵使朴晋への移文、被擄人處通諭檄書、被擄生還者の納供金誠一檄文、趙宗道通文、京城消息、許儀俊上書文、其他數

通の文書を収録す。是等の文書は金暉の自書にあらずんば彼の手を経し者のみとして差支へなし。實に本書は壬辰四月より七月に至る間の慶尙道の情狀を知るには重要な記録にして、其収録するところ皆根本史料たるべきものなるが故に最も尊重すべし。是等の文書もしくは其謄本は京城奎章閣にも存せず。

10 控 于 錄

一册

寫本

文興君柳思瑗

宣祖王二十九年丙申(1506 A.D.)明より日本に使せし楊邦亨等が封事を成す能はずして回るや、朝鮮は鄭期遠萊城を遣し奏聞使とし、柳思瑗文興を書狀官とし、明朝へ由を具して、奏聞せしめたり。本書は柳思瑗が此使行の見聞事件を誌せしものにして、其見聞せし事實と、其明朝官府へ呈せし文書及び見ることを得し書類とを収録せり。壬辰役の史料として極めて珍重すべきものなり。

11 北 遷 日 錄

一卷一册

版本

鄭 忠 信

李朝の名相李恒福白沙の、光海王が母后を廢せんとせしを諫めて、北背に流さるゝや、其門下生鄭忠信が配行に隨伴して始終忠實に侍せしは、一美談として傳へらるゝ

為悶迫官軍義旅并四千餘名時方處之設伏臣段
置自居昌馳向同州率諸將指揮禦許料為白齊
其他郡縣雄據之賊夜則隱然輸卜下去晝則佯示
上去之狀連絡道路莫測奸謀尤為痛甚郡邑見沒
已久人心思 漢方極各處鄉中之士召集鄉兵已
至一萬餘衆與官軍合勢或設伏兵或追擊宜寧居
郭再佑先倡之陝川鄭仁弘高靈金沔等繼起之其
詳招諭使金誠一已盡馳 啓為白有齊近日捕斬
之數大槩二百五十餘級射殺未斬六十餘名射中
二百五十餘名其中金沔之軍本月初十日洛東江

事なり。本書はこの鄭忠信が誌せし其北遷の日録にして、先づ李恒福が光海君に罪を得し顛末を記し、次に戊午(1688 A.D.)正月八日此老宰相が配所北青に向ひて京城を出て、二月六日北青に着し、五月十三日病死し、八月七日北青にて三虞祭の行はれしまでの事を日を逐うて誌し、これに廢母后の時の獻議手草を摸印して附せり。崇禎紀元後四十二年丙寅(1626 A.D.)附の南九萬の序あり、此頃の刊本なり。

12 護聞瑣録

二册

寫本

曹

仲

朝鮮燕山君、中宗王時代の文士曹仲の著作にして、朝鮮の野史中有名なるものなり。曹仲自身の談話の外に、兄曹偉の海溪叢話と、友南孝温の秋江冷話とを収録し、併せて二百二十餘條の談話あり。詩文の評論、先輩の遺事逸話、史傳地理の記事等にして、日本に關係せる記事も少からず。朝鮮の諸史籍が史料に採用せる條多し。

13 朝野零言

三册

寫本

著者の見聞を誌せし漫録躰の記録なり。尤も顯宗、景宗王代の記事のみは、隨筆的

之今北京一路關外遼陽等處男女常服皆是
 絲布本國舊無木絲只用麻苧蠶絲為布高麗
 末晉州人文益漸嘗入朝取木絲種潛貯囊中
 并製取子車繅絲車而來國人競傳其法未百
 年流布中外國人上下所服大抵皆是轉貨居
 積盛行於世比麻布倍蓰初生閩越極南之地
 遍滿天下利益於人未有如此物者及今盛於
 東方益漸之功不下黃道婆國家嘗錄用其子
 孫云盛於一作盛行
 古云問國之富數馬以對中國人例以銅錢全

ならずして、正しき記録体なり。記事は英宗の初年に終る。本書の中には英宗と書し、又端宗の語あり。思ふに正祖王代の著作ならむか。史料として價値あり。殊に末卷を貴しとす。

14 我々録

二册

寫本

南紀濟

李朝の黨争士禍を誌せる者にして、英祖王時代の老論派の一人たりし南紀濟の著なり。上卷は龍岡問答と題して、龍岡の僧舍に老論・少論・南人・北人の各一人が會して論辯せる跡に假作せり。其論の老論に偏するは勿論なれども、宣祖王・景宗王時代の黨争の概略を知るには便利なる書なり。下卷は士禍と題し、これに壬子・丙子二亂の記事を附せり。士禍は端宗王より景宗王までの間に起りし十二士禍を歴叙せり。

15 御定洪翼靖公奏藁

三十五卷 十八册 原本

洪 鳳 漢

英祖の相臣洪鳳漢が銓對諸奏のうち、偉績閑休の紀すべき者を真輯し、王裁を経たる書なり。全部三十五卷、之を典禮・黜陟・法紀・財賦・軍旅・營繕の六類に分ち、更に之を

五十九目に分ちて、其の奏疏等の文を類輯し、外に別考一卷を添へたり。英祖王代(1725—A.D.)の史料として有力の書なり。

16 立朝始末録

三十卷 十五册 寫本

英祖王の時、尹汲が立朝の始末を記せる追日の記にして、英祖王元年乙巳(1725 A.D.)より四十年甲申に至る。本書は尹氏の家乗たるべきものにして、廣く傳寫せらるべき性質のものにあらず、また尹汲の印あるより推せば、尹汲の原本なるべし。珍奇なる書といふべし。たゞに珍奇なるのみに止まらず、實に英祖王代黨争激甚なりし歴史研究に貴重なる書なり。

17 燕行日記

二册

寫本

尹

汲

英祖王二十二年丙寅清乾隆十一年(1746 A.D.)戶曹參判尹汲が冬至兼謝恩副使として、正使海興君樞の下に、北京に赴きし時の日記なり。先づ人馬渡江記あり。次に本文燕行日記ありて、丙寅八月十九日副使を拜命せし事を記し、それより十一月六日京城を出發して北京に赴き、翌年四月十七日漢城に歸還せし迄、約五月半の間、口を逐う

立朝始末錄卷之十一

乙丑

正月二十二日因備局

以後國子堂上
並請從重推考

二月初九日

命移補近邑

同日大備堂入侍時副提學元景夏曰聖世刑
賞貴在得中處分若過中則臣何敢不違乎向來
銓堂補外時臣待罪湖藩得伏見於補外兩銓堂而適
亦生事俱被罪外之通清不專出於補外兩銓堂而適
因生事俱被罪外之通清不專出於補外兩銓堂而適
達而臣意則以為同是銓堂雖以閱書不區別陳
應洙移補畿邑尹汲獨遠補於南土瘴鄉不區別陳
疾水土所傷聞其疾甚重云處分豈不偏重乎左相

燕行日記

丙寅

八月十九日以行副提學拜謝恩兼冬至副使

君權書狀
官安備

十一月初六日晴極寒詣阙拜表到慕華館行

查對宿高陽是日行四十里

先是彼中有退柵於我境未百里之地且有設屯

於蘇牛峭相義州之舉朝廷差遣奏請使請殺

兩事並得准所謂謝恩蓋以此也昧爽詣阙入

騎省鄭叅知陽來京復方入直與之叙別鄭奉事

て誌せり。次に、渡江狀啓、到柵門外封啓等、途中より李朝への報告文を載せ、また方物敷を記せり。此種の日記は類多しと雖、いづれも貴重なる史料なり。本書は尹汲の家藏本なり。珍本といふべし。

18 忠剛公李先生實記

一冊

版本

李之淳

英祖王四年(1728 A.D.)李鱗佐の叛せし時、其黨鄭希亮が居昌縣を陥れし際、節義に死せし李述原の實記なり。正祖王十二年(1788 A.D.)述原の曹孫、之淳の撰にして、世系事實、祭文、墓誌、銘、誥、疏、諡狀に分ち、之に純祖王十二年(1810 A.D.)金麟淳の序、同王三十一年宋稱圭の序、憲宗王三年(1837 A.D.)趙寅永の序あり。最後に、先王七年庚午(1870 A.D.)金尙鉉の跋を附す。此書の刊行は此時に成りしものゝ如し。

19 宮園儀

二冊

版本

宣撰

正祖王の生父莊獻世子の廟墓景慕宮、永祐園の祭祀の節目、儀軌を誌せし書なり。英祖王薨去し、正祖王繼承の年丙申(1776 A.D.)戶曹判書金華鎮、禮曹判書李福源等、王命を奉じて撰し、王九年乙巳(1785 A.D.)八月書成り、王親ら景慕宮に詣り、之を上り、饗

文閣にて刊行せり、本書上下二巻と附録とあり。上巻は圖説、下巻は儀注にして、附録は宮園の設置に關する官府的記録なり。此冊子は乙巳刊行の時、朝士李某に内賜せられしものにして、奎章の寶の印は奎章閣經由の書たる證印なり。

20 箕子志

九卷 三冊

版本

箕子關係の事項を収録せる書なり。箕子は半島儒者の理想的建國者なり。宣祖王の時、尹斗壽陰樞箕子志を作り、世に行はれしが、先王の初年に至り、儒生等之を疎略多しとし、復び經史に所載せる箕子關係の項を輯し、野史小説の類に載するものも盡く収録して九巻とし、先王十五年戊寅一治十書成り、翌年刊行す、是即本書なり。本書に已卯重刊とあるは尹氏の書を増補して刊行すとの意ならんか、本書箕子の眞像あり、手筆あり、譜系世系を誌し、荒誕を極め、無稽を盡くし、暗愚極まれりと雖、理想的箕子が朝鮮人に及ぼせし思想上の感化影響を見るに重要な書なり。

21 東國文獻錄附祖豆錄

三冊

版本

簡單なる人名辭書として便利なる書なり。上巻は黃閣文衡、儒林筆苑、都元、副元、登

壇に篇を分ち、下卷は封君篇とし、各篇の下に國初より哲宗王までの文武官儒者の其篇目に當る者の姓名を年代順に擧げ、一人を一行もしくは半行に限り、これに字號生年、諡號等を注せり。但し儒林の一篇は特に新羅朝より収録せり。 組豆錄は文廟、李氏宗廟、大報壇、其他の祀廟、書院等の各建設の年代を記し、これに祀せらるゝ人名を列記し、其下に極めて簡單なる注を施せり。先王時代の刊本なり。編者明ならず。

22 海東名將傳

六卷 三册 版本

洪 良 浩

朝鮮半島に出でし名將の列傳にして、著者洪良浩は耳溪と號し、正宗王の時文衡を典りし學者なり。本書は著者の自序によれば、正宗王十八年(1794 A.D.)に成れるものなり。本書、新羅に金庾信以下五人、高句麗に扶蘇奴以下三人、高麗に庾黔弼以下二十一人、李朝に李之蘭より柳琳まで二十三人の傳を收む。三國史記、高麗史、名臣傳等に據りて撰びしものゝ如し。

23 蜻蛉國志

二卷 二册 寫本

日本の歴史風俗等を誌せし書なり。第一卷は世系圖、世系氏姓、職官、人物、藝文、神仙

の七項を、第二卷は輿地圖、輿地風俗、器服物産、兵戰異國の七項を誌せり。朝鮮人の著述せる日本國誌中比較的完全にして正確なるものゝ一なり。世系圖及世系は貝原篤信の作りしものを採りしことを附記せり。思ふに、通信使が日本の儒者文士と筆談によりて得し智識と、其購ひ還りたる書物、殊に半島に多く輸入せられし和漢三才圖會の類を資料として、著述せしものならむ。本書の文中に寶曆今、戊戌十七年の語あり。寶曆に戊戌なきが故に、是れ誤推なりと雖、本書が寶曆に近き戊戌歲、即正祖王二年(1778 A.D.)に成りしことは明なり。

24 通文館志

十一卷 五册 版本

通文館は李朝舊制に事大交隣の事務を掌る官署にして、司譯院とも稱せり。此官署の典例儀節たゞ口傳のみにて記録とはなかりしを、肅宗王四十五年(1719 A.D.)館の漢學教授金慶門、其沿革、典例儀節、故事、紀年等、細大となく蒐輯して、本書を成せしより、其後屢、改訂増補の事ありき。此版本は先王十八年四年治十に増補刊行せるものなり。本書の記事には誤謬もなきにあらずと雖、朝鮮の事大交隣史を研究するに必要なる書なり。但し本書の紀年は、攷事撮要の紀年に續くものなるが故に、

謹	前	亦	題	應	官	國	一	查	精	向	禮	顯	八	蘭	而	貌	隻
着	議	難	鄭	將	難	王	並	康	備	年	部	宗	年	陀	處	惟	敗
免	奉	辯	知	該	免	申	議	熙	俺	正	咨	大	掠	國	之	詭	於
罰	旨	答	和	王	疎	飭	罪	二	等	副	進	王	得	在	海	言	珍
餘	國	罰	等	議	忽	該	奉	年	十	使	獻	八	小	極	邊	語	島
依	王	銀	雖	處	之	王	旨	黍	分	皆	紙	年	舸	南	至	不	而
議	既	一	供	兩	咎	不	寬	皮	看	稱	每	丁	遁	海	是	通	幾
○	將	千	稱	部	奉	議	免	紙	擇	國	網	未	言	中	對	不	半
遺	禮	兩	伊	即	聖	外	其	而	地	而	內	紀	漂	常	馬	識	洵
檜	物	使	國	免	旨	進	議	今	磽	不	有	年	至	時	島	文	死
原	交	及	王	議	進	正	鄭	鄭	薄	及	加	三	此	來	商	字	餘
君	與	在	常	不	貢	副	知	和	正	向	申	四	云	商	移	不	者
倫	臣	事	加	合	禮	使	和	等	使	年	飭	卷	云	於	書	知	三
等	下	各	申	着	物	並	等	呂	不	勝	顏	十	十	日	禮	為	十
陳	令	官	飭	再	若	在	則	爾	爾	載	之	十	十	本	曹	何	六
奏	其	仍	該	議	不	事	既	載	爾	載	敬	十	十	今	曰	國	人
使	敬	照	王	再	堪	各	經	等	等	等	及	十	十	有	阿	人	狀

致事撮要と相俟つて完全なりとすべし。

25 大典通編

六卷 五册 版本

正宗王の時撰述せしめたる法制書なり。王の初年に、經濟六典、經國大典、續錄、後續錄、受教輯錄、續大典等、李朝の典章甚だ浩穰に到りしを以て、王八年(1784 A.D.)、金致仁、金魯鎮等に命じ、局を開き諸典を會粹して、本書を撰ばしめ、翌九年書成れり。本書、經國大典の文には原の字を標し、續大典の文には續の字を標し、續大典以後に増補せしものには増の字を標せり。

26 海東樂府

一册 寫本

沈光世

舍人沈光世が萬曆丁巳(1617 A.D.)に作りし有名なる史詩なり。新羅高麗朝鮮の三朝の歴史事實より興味ある題目四十餘を採りて、其解説たる序を作り之を詩に詠せり。此詩序の内に、徃々史料として價值あるものあり。

27 東國樂府

一册 寫本

四嶠李匡師道甫

沈氏の海東樂府と體裁を同らし、檀君より高麗朝末に至るまで數十條の事蹟を題

某戈只進叱使內良如為 <small>가오지진叱내량如爲</small>	望良白內卧乎 <small>망량백내卧乎</small>	事是亦在 <small>사是亦在</small>	教是卧乎在亦 <small>교是卧乎在亦</small>	為乎乙 <small>爲乎乙</small>	為有去乙 <small>爲有去乙</small>	為行如可 <small>爲行如可</small>	為白只為良如 <small>爲白只爲良如</small>	所如中 <small>所如中</small>	為白有昆 <small>爲白有昆</small>	為有如乎 <small>爲有如乎</small>	為良教 <small>爲良教</small>	在而亦 <small>在而亦</small>	為白等以 <small>爲白等以</small>	是置有是亦 <small>是置有是亦</small>	直為 <small>直爲</small>	喻在果 <small>喻在果</small>	使內白如乎 <small>使內白如乎</small>	是去有良俞 <small>是去有良俞</small>	為有 <small>爲有</small>
--	---------------------------------	-----------------------------	---------------------------------	---------------------------	-----------------------------	-----------------------------	---------------------------------	---------------------------	-----------------------------	-----------------------------	---------------------------	---------------------------	-----------------------------	-------------------------------	-------------------------	---------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------

吏文

天
 年號 統年 某月某日 新授 某官 姓名 經狀
 伏 祿 分 祿

目として、歌詩に詠ぜしものなり。其事實は皆三國史記三國遺事高麗史に見えたるものなるが故に、この書の詩序の價值は海東樂府に及ばず。圓嶠は李朝英祖王(1735—A.D.)頃の人にして、書に巧なり。

28 典律通補

四册 寫本

正宗王が綾恩君具允明に命じて撰ばしめし政書にして、經國大典續大典大明律を合せ、其緊關無き者は之を略し、現行のもの、特に因循擧らずと雖、革廢し得ざるものとは之を載録せり。六卷外に別編一卷ありて、王の十年(1786 A.D.)に成れり。六卷は吏典戶典禮典兵典刑典工典にして、別編は典律以外に官廳に於て要用ある事項をしるし、致事撮要を簡略せる如き牒裁のものなり。

29 大東金石

一册 寫本

新羅の古碑より、李朝孝宗王代(1650—A.D.)許穆史の東海碑に至るまでの、朝鮮半島に於ける金石目錄にして、其書家及び所在地等を注せり。續編にも十數の古碑目を載す、内には當時既に湮滅せるものもあり。朝鮮の金石學に必要の書なり。著

者及年代未詳。

30 陟州東海碑

一帖

拓本

許穆の篆書にして、陟州とは江原道三陟をいひ、大嶺の東にありて、日本海に臨める地なり。許穆は眉叟と號し、孝宗顯宗時代の人にして、篆は東方第一たりとの評あり。此碑初め顯宗王二年(1661 A.D.)汀羅島に建てられしが、風濤の爲に流され、肅宗王三十五年(1709 A.D.)竹串島に再建せられたり。本帖は此再建のもの、拓本なり。

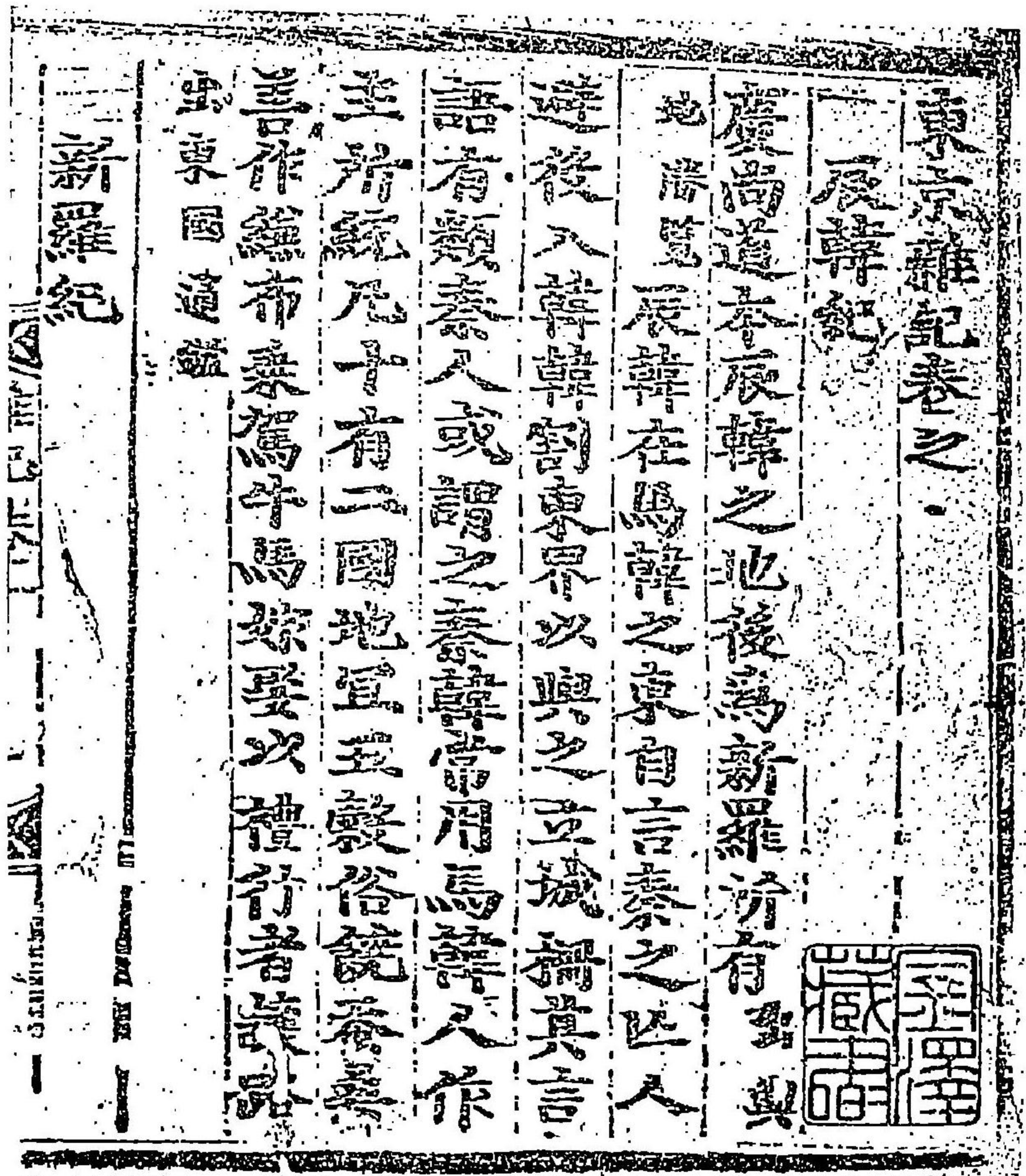
地誌類

31 東京雜記

三卷 三册

版本

新羅舊都慶州の邑誌にして、西京城平志、中京城明誌と相並て有名なるものなり。目を分つこと五十、慶州に關する古今の事物を記述せるを以て、新羅の歴史地理研究には重要な書なり。溯源録が引用せる東京誌刊誤及び韓籍目錄稿本には、府尹權以慎或作の作とすれど、俄に信ずべからず。思ふに、壬辰亂に府吏崔洛が保藏せり



といふ東都事蹟の類を底本とし、邑の故老が増修せしものを、顯宗王の時府尹周堯刊行し、肅宗王辛卯(1711 A.D.)に府尹南至薰の修板せし書なり。近時の流布本は府尹成原默の改訂本なり。

32 中京誌

十一卷 六册 版本

中京とは高麗朝の舊都開城の別稱にして、一に松都ともいふ。本書は其邑誌にして、仁祖王二十六年戊子(1648 A.D.)留守金堉孝宗王の時に領議政に陞る東國名臣傳の著者なりが此邑の遺老淵臣俊の撰びし松都雜記を筆削修訂して作成せし邑誌に基き、後世屢々増補潤色し、或は續誌を撰び補遺を作り、哲宗王(1850—A.D.)の時に此正續補を併せて刊行せしもの即本書なり。本書目を分つこと五十餘、開城に於ける歴史地理風俗政事一切を記述す。東京誌西京誌と相並び總稱して三京誌と云ひ、邑誌中の完備せるものに數へらる。

33 箕城志(平壤志)

四卷 一册 版本

平壤西京、箕城、柳京の別名ありの邑誌なり。平壤は高句麗の建都以來重要な地なれば、其邑誌が政書地誌史籍として重要なものなること論なし。本書は萬曆十八年(1590 A.D.)有名なる尹斗壽が平壤府尹たりし時編纂せしものにして、目を三十三に分ちて記述し、邑誌としては古きものなり。後年に至りて續志あり、又近年改訂刊行せるものありと雖も、尹氏の舊本最も價値あり。此書流布本多しと雖、平壤古圖を附せるは他の冊子に未だ見ざるところなり。

34 成川誌(仙都條例)

正續二卷 續編四卷 二册 版本

平安道成川の邑誌なり。乾冊は正編にして、宣祖王三十六年(1603 A.D.)此邑に來守せし李尙毅の著述せしを、肅宗王頃に増補せしものなり。上下兩卷より成り、成川幅員圖成川官府圖成川降仙樓圖を掲げ、次に二十五の目に分ちて、邑の一切を記述せり。内に遺事と題して誌せる朱蒙出生記は、甚だ珍貴なる一文なり。坤冊は續志にして、丙申英宗王五十二年か、憲宗王二年か、思ふに後者なるべしの年府使として來りし李東老の著なりといふ。四卷あり、四十餘の目に分ちて記述す。正續兩篇共に憲宗王八年(1842 A.D.)邑人徐薺坡等刊行せり。

35 耽羅志

一册

版本

耽羅は濟州島の古名にして、本書は其邑志なり。沿革風俗地理政事等一切の事項を収録し、其古蹟は輿地勝覽により攻究して誌せしこと跋文に見ゆ。濟州島は特殊の歴史と風俗とを有し、上代日本と密接なる關係ありしを以て、特に研究すべき價值あり。此點に於て本書は缺くべからざる材料なり。英祖正祖頃に編纂せられし書なるべしと雖、邑誌中稀有なるものに屬す。

36 筠心閣叢書

一册

寫本

本書は其地理類にして、貴重なる次の七種より成り、研究の好資料たり。

- (一) 東國邊界雜致(嶺州の地誌なり)
- (二) 關西嶺陘防守事宜說 田學中
- (三) 論江界東宜狀庚申平安監司李泰永寧邊人金志初
- (四) 論嶺陘形勝書
- (五) 論移設江界四鎮當否牒 柳德魯
- (六) 廢四郡事實
- (七) 關防附關防總論

これみな李朝後半期の北邊に關係あるもののみにして、此方面の研究には缺くべし。

からざるものなり。純祖王(1801 A.D.)以後の書なり。

37 金剛山記附東遊詩

一册

版本

趙成夏

金剛山記東遊詩遊金剛日程の三篇より成り、趙成夏の作なり。成夏字は舜韶、少荷居士と稱す。豐壤の名門なり。本書は先王乙丑(1865 A.D.)成夏が金剛に遊びたる時作れるものにして、本山は半島第一の勝地なり。

38 熱河紀行詩註

一册

寫本

柳得恭

歴史地理學者として有名なる柳得恭が、清朝熱河の行宮に使せし紀行詩に、清人の評を加へたるものなり。

<p>玄武門<small>후도</small>티호사래마노니希世之事<small>후도</small>리라 <small>希通</small> <small>作稀</small></p>	<p>아스물<small>아</small>가<small>스물</small>가 <small>後去聲猶肆也</small> <small>言不為限量也</small></p>	<p>玄武兩砲<small>하</small>一箭俱中<small>하</small>希世之事馮以示衆<small>하</small> <small>中去聲</small></p>	<p>照浦三聲<small>하</small>一箭俱徹<small>하</small>天縱之才豈待畫識<small>하</small> <small>徹直列切</small> <small>畫胡挂切挂也</small> <small>五色挂物象也</small></p>	<p>唐玄宗嘗遊獵<small>하</small>一發中兩砲於玄武北門<small>하</small> <small>玄宗名隆基唐高宗子也中書省當時命韋無忝傳馮之切</small> <small>馮洗野</small></p>
---	---	---	--	---

言語類

39 龍飛御天歌

十卷十册 版本

世宗王二十七年(1445 A.D.)鄭麟趾權巽安止等の撰ぶ所にして李朝穆祖肇基より太宗王潛邸の時に至るまで歴代の盛徳を稱したる歌詩一百二十五章なり。さづ諺文にて支那帝王の徳を歌ひこれに李朝の事蹟を對せしめ更に各章の下に朴彭年姜希顔申叔舟成三問の撰びし其用事の本末を加へたり。本書は麗末より李氏初に至る史料として有用なるのみならず諺文製作者と同一人の手になりたるものなるが故に諺文の起原を研究するに最も有力なる材料の一なり。

40 歌曲源流

一册 寫本

朝鮮の歌集なり。歌の風度を(一)初中大葉(二)二中大葉(三)三中大葉(四)後庭花(五)二後庭花(六)初數大葉(七)二數大葉(八)三數大葉(九)編搔聲(一〇)蔓橫(一一)樂詩調(一二)編樂詩調(一三)編數大葉(一四)弄歌に分ち讀人には孝宗肅宗等の諸王李退溪鄭夢周成三問李舜臣等の

남훈리영가 권지상
 낙시도 롱 필 송 속용 우도
 후경회 계현 반송리역 원신경
 잡기 기사
 낙시도
 간방에부드발알안창도회각지각안회는빙을를
 고스로작하늘은나낙한를잇아라스리부
 속
 기묘의이요종은한데보정회학월명사회
 푸의스칭응야장관신만하중에원촌의을
 계명하디이승남
 이회도약회기이중칭은회경주회이부
 엇노회후리진비죽강귀을어낙회강스
 리김의주회술치고송경의구어스니철
 김니

名臣武將あり、直伊、挂娘、松伊等の歌妓ありて、百濟人成忠、高麗人乙巴素等の名も見えたり。

41 南薰太平歌

二册 版本

朝鮮の歌集年代不詳なれど、歌曲源流より後の撰なるべし。樂詩調後庭花雜歌歌詞等に篇を分ち、短歌長篇合せて二百三十數首を集めたり。

42 北闕重建歌

一册 寫本

景福宮重建役事の歌諺文にて記さる。景福宮は太祖のときに營まれ、壬辰役に灰燼に歸し、爾來敗址となれること殆んど二百七十年、大院君に至りて再び重修せらる。篇中、爾來九萬八千日、列聖朝三百年有意未就の句あるはこれをいへるなり。

43 捷解新語

十二册 版本(内登册寫本)

朝鮮人の編述せる日本語學書中恐らく最も古きものなるべし。朝鮮版「隣語大方」にも「我々方に捷解新語と申して、日本詞を習ひまする本が御座るにより、其元様へ

形言(シムス)

容懐(ヨウケイ)

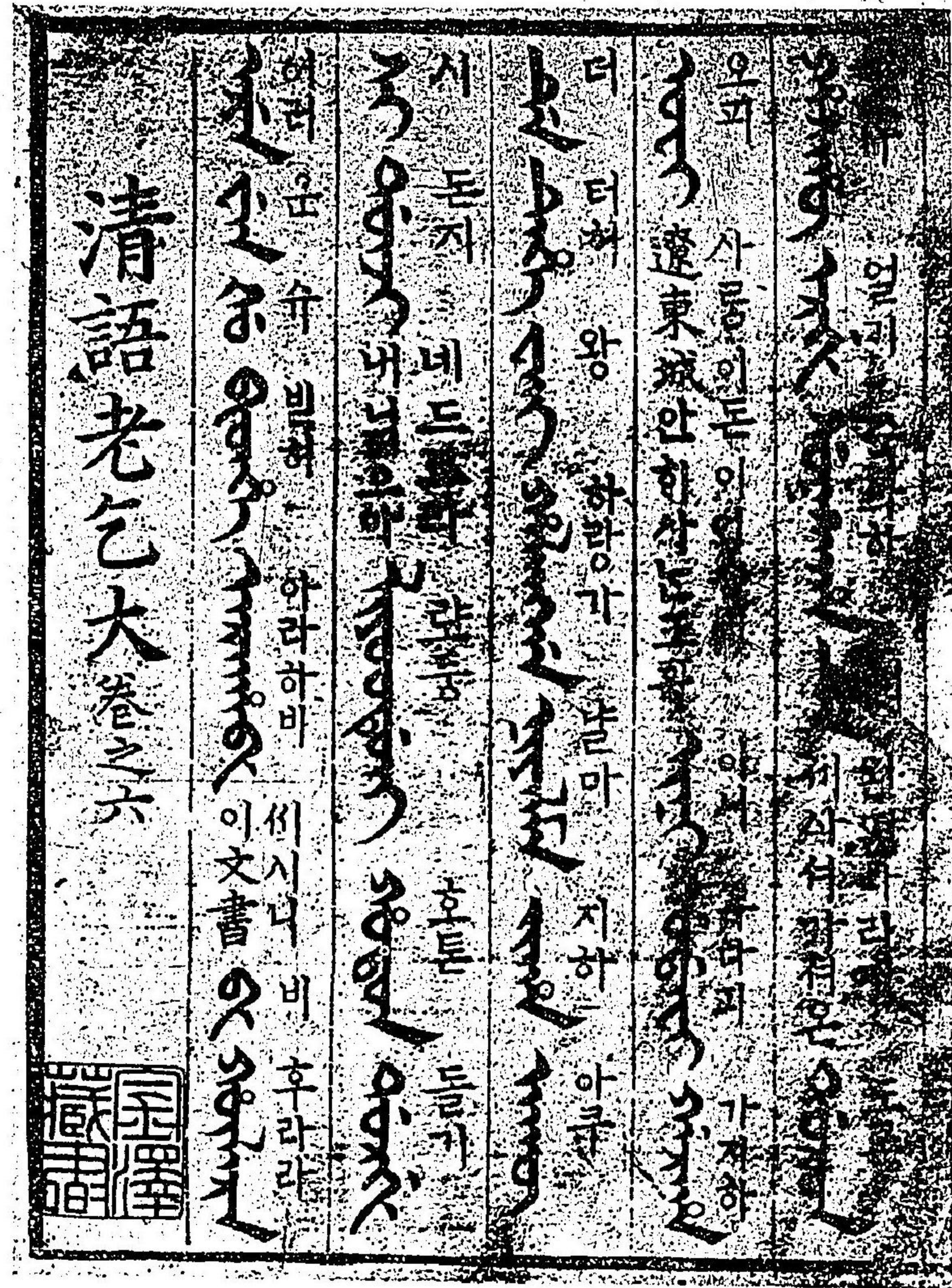
그이明朗(양)을보면淒涼(청량)하여容懐(양)가더(더)하(하)외
 如(유)는後(후)如(유)가強(강)하(하)는(는)후(후)로(로)는(는)容(용)懐(회)가(가)더(더)하(하)외
 惡(악)은(은)如(유)가(가)後(후)如(유)가(가)人(인)我(가)盟(맹)의(의)는(는)後(후)로(로)는(는)
 惡(악)은(은)事(사)를(를)하(하)는(는)後(후)로(로)는(는)後(후)로(로)는(는)
 계집은(은)妬(두)忌(기)심(심)하(하)는(는)기(기)의(의)연(연)단(단)하(하)는(는)무(무)한(한)계(계)집(집)은(은)의(의)시(시)
 여(여)름(름)을(을)阻(저)르(르)는(는)일(일)이(이)시(시)나(나)아(아)니(니)무(무)섭(섭)스(스)온(온)가(가)

うて語を集むること約三千五百漢字の下にその朝鮮音訓と我字音とを二行に記し下段に日本譯を諺文にて添へたり。著者及び刊行の年代いづれも不明なれど本書の終に信行使所經地の名を擧げたる中に、日光山權現堂の見えたるより考ふれば、或はその一行中のものゝ作ならんか。朝鮮人が日光の廟を拜したるは、寛永十三年(1636 A.D.)同二十年と明曆元年(1655 A.D.)となり。本書は西曆一千八百三十五年英人 Medhurst これを翻譯し(Comparative vocabulary of Chinese Korean and Japanese)て出版し、國禁を犯して朝鮮に入りたる佛國宣教師等のために語學の指南となり、また我國に於ける朝鮮語學者の鼻祖たる雨森芳洲の交隣須知の臺本となれり。

45 隣 語 大 方

八卷 四册 版本

雨森芳洲の交隣須知と共に久しく本邦に於ける朝鮮語學習の教本たりしものにして、明治六年對馬の浦瀬裕氏の翻刻したるものあり。著者年代ともに不明なれども、その内容に徴すれば朝鮮文を日本語に譯したるらしき形跡あり。恐らく對馬人の著作なるべし。別段の順序等もなく、折にふれたることゝもを日本文にて記し、次に漢字諺文混りの朝鮮文にこれを譯せるものなり。



46 新釋清語老乞大

八卷 八册 版本

朝鮮に於ける滿洲語學習の教本にして、全篇會話体よりなる。清の太宗朝鮮を伐ちたる時、南漢山城の役仁祖十一年(1636 A.D.)に捕虜となりて滿洲に赴けるもの、著作にして、英祖の三十六年(1760 A.D.)咸興の譯學振夏更らに滿人に就きて之れを質し、同王の四十一年これを刊行せり。

47 重刊三譯總解

十册 版本

滿洲軍入寇以來文書の往復に語學の必要を感じ、小兒論八歲兒等の譯書行はれたりしが、肅宗の七年に至り相國閔老峯更に崔厚澤李濺李宜白等に命じて三國誌を拔萃し本書を編せしむ。初版は康熙四十二年即ち肅宗二十九年(1703 A.D.)になれりも、歲月と共に書冊散逸し、言語にも異同を生じたれば、かの金振夏これを校正し、乾隆三十九年英祖五十年(1774 A.D.)これを重刊せり。



48 八 歲 兒

一册 版本

古くより朝鮮に於ける滿洲語通事の試業に用ひられたるものにして、卷尾に檢察官金振夏書寫官張再成の名あり、乾隆四十二年(1777 A.D.)改刊せられたるもの。皇帝が天下の儒者五千人を集めて下問せらるゝとき、八歳の幼兒獨り總ての難問を容易く答辯せりといふ昔話なり。

49 小 兒 論

一册 版本

八歳兒と同じく古くより滿洲語通事の試業に用ひられたるもの。乾隆四十二年(1777 A.D.)の改刊にして、卷尾に檢察官金振夏書寫官張再成の名あり。これは官吏が三歳の小兒に難問を試みる物語なり。

50 三 韻 聲 彙

四册 版本

英祖王二十七年(1751 A.D.)金在魯の序あり。著者は洪純甫、主として洪武正韻の字母に基きて崔世珍の四聲通解を諺翻し、先づ朝鮮音を大書し次に支那音を分書す。字數總計一萬二千九百七十一。補篇として玉篇を附し、索字に便にせり。

東	控	筮	空	功	工	公	東
春方	朴器	篋	虛也	績也	巧	子	平聲一〇
凍	控	控	又司	紅	刊	公	文二百三
暴雨	蒙	無知	去	全女	也	無私	
凍	控	控	控	紅	紅	紅	文四十六
蟬	控	控	控	紅	紅	紅	
互	自	鳴鼓	又全	孔	孔	孔	文四十六
洞	又物	又物	又物	控	控	控	
控	控	控	控	控	控	控	文六十一
控	控	控	控	控	控	控	

51 華東正音通釋韻考

二卷 二册 版本

著者は密陽の朴性源李彦容と共に三韻通考を崔世珍の四聲通解等に照して訂正し支那音朝鮮音を諺文にて正したるもの。刊行の年代詳ならず。

52 朝雲暮雨

一册 寫本

韻書なり。卷尾に乾隆庚子(1746A.D.)仲春金鼎瑞編輯書と見ゆ。

53 御定詩韻

一册 版本

憲宗王の命により奎章全韻を改刊して袖珍本となせるもの原増叶文總一萬三千三百四十三。王の十二年丙午(1846A.D.)六月尹定鉉の序あり。

54 音彙

一册 寫本

著者年代ともに不詳。同音異義の漢字を集めてこれに朝鮮訓を施したるもの。

て本書を編す。支那語初學者のための指南書なり。光緒九年(1883 A.D.)刊行。

61 中華正音 一冊 寫本

著者年代ともに不詳、官話の會話篇なり。諺文にて支那音を付し、更に朝鮮譯を加へたり。

62 語錄解 一冊 寫本

一字類より六字類に至る漢語に註解及朝鮮訓を附したるものも、と退溪李滉、肩巖柳希春及び其門生等の記せし所にして、顯宗王宋浚吉等に命じて、更にこれを増補釐正せしめたり。己酉(1669 A.D.)四月の跋文あり。

63 覽 一冊 寫本

著者年代ともに不詳。語錄解の類にして、漢語句の難解なるもの、註釋なり。

64 吏讀便覽(吏讀攷) 一冊 寫本

一字類より十字類に至るまで、類を追うて吏讀を集むること凡そ三百種、一々諺文

にて其讀方を註せり。次に崔世珍の吏文輯覽中より、最普通なるもの百數十を擧ぐ、いづれも新羅時代の古語と推定すべきものなり。また別に宋時の語錄中より、音訓の異なる語彙若干を集めて、附録とせり。著者年代ともに不詳。

65 訓蒙字彙 一冊 寫本

崔世珍の訓蒙字會と同書なるべし。天文花品鱗介昆虫人倫儒學等に項を分ち、語彙を集むること凡三千。漢字の下に諺文にて朝鮮音訓を附し、更に漢文の註釋を添へたり。

66 註解千字文 一冊 版本

67 校訂玉篇 二卷 二冊 版本

68 學書要覽 一冊 寫本

著者年代ともに詳ならず。序に、歲甲子律中大呂錦溪謾士題とあれば、もしは文祿の役捕はれて我國に來りし魯認(字は公識、錦溪と號す)の作にあらじか。點劃の混

じ易き漢字を類別し、奎章全韻中の同字、俗字、朝鮮にて作りたる新字、略字及び古字等を蒐集せる字書なり。

69 文字類輯 一冊 版本

著者年代ともに不詳。天道地道萬物人倫人事君道臣道天官地官以下の十三門に分ち、類語類句を集めたるもの。

70 御筆孟子諺解 十四卷 七冊 版本

跋文に據れば、元宗大王の書なりといふ。

71 草簡牘 一冊 版本

書簡文を草書体に書きたるもの。著者年代ともに不詳。

72 簡禮彙纂 一冊 版本

公私用文の文例書式を示せる書なり。

文集類

73 桂苑筆耕 二十卷 四冊 版本

崔致遠

新羅崔致遠の文集なり。崔致遠、字孤雲、年十二入唐して學び、及第して兵馬都統高駢の從事官となり、憲康王十一年(885 A.D.)新羅に還り、翰林學士守兵部侍郎となりしも、衰季の世に際し意を仕進に絶ち、山水に放浪して終れり。高麗顯宗王の時、文昌侯を追封し、今に至るまで尊崇を受く。新唐書文藝志に、崔致遠四六集一卷、桂苑筆耕二十卷を録せり。本書はこの桂苑筆耕にして、其唐に在りて作りし文のみを收め、半島に關係する者なし。崔致遠は此外に文集三十卷ありしも、四六集と共に今傳はらず。本書は新羅人の文集中、現存する唯一の書なり。其刊行は高麗朝にありしなるべく、此冊子は純祖王三十四年甲午(1834 A.D.)の重刊本なり。

74 圃隱先生集 四卷、外三冊 版本

鄭夢周

圃隱は麗末の名臣鄭夢周の號なり。鄭夢周は朝鮮の太祖李成桂が不逞の志ある

を知りて苦心慘澹たるものありしが、遂に李成桂及び李芳遠(太宗)の爲に殺され、高麗朝も頓て滅びたり。儒者として彼は東方理學の宗と尊崇せられ、又我國に來り、今川貞世と應接せしことあり。本刊本は、肅宗王四十五年己亥(1719 A.D.)のものか、もしくは其翻刻本にて、卷一二は詩を、卷三は雜著と宣祖王の時柳成龍が收拾せる拾遺遺墨とを收め、卷四は年譜附録にして、いづれもみな柳成龍の校定を経たるものなり。續錄三卷は、肅宗王己亥刊行の際、鄭續輝の編輯せしものなり。

75 梅月堂詩四遊録

一卷

版本

金時習

梅月堂は金時習の號なり。金時習字は悅卿、東峯碧山、清隱、清寒子、梅月堂等の號あり。世宗王十七年乙卯(1435 A.D.)に生れ、神童の名あり。廿三歳の時、世祖王魯山君の位を篡奪し、次で之を弑するや、時習憤慨して沙門に入り、雪岑と名け、世と絶ち狂吟放浪一世を玩弄し、成宗王二十四年癸丑、鴻山無量寺に終る。金時習の經歷かくの如し、其詩想亦思ふべし。本書はその遊關西錄、遊關東錄、遊湖南錄、遊金鰲錄の四遊録を輯め、別集一卷を附す。各録みな詩より成り、簡單なる跋を添へたり。此刊本は宣祖王もしくは光海君の代に、好文の士が陰崖李紆の手澤本を得て刊行せし

ものゝ如し。明治十七年東京にて刊行せし金鰲新話と併せて讀まば、感興更に深かるべし。

76 錦溪集

八卷二册

版本

魯

認

錦溪は魯認の號なり。認字は公識、咸平の人、宣祖王壬辰義兵となりて權慄に従ひ、丁酉南原にて虜へられ、日本に囚俘となること數年、後、明の使節林震龍に従うて閩中に到り、更に朝鮮に還り、光海君の時死せりといふ。本書錦溪集といふといへども、魯認自作の詩文は甚だ少なく、純祖王十一年崇禎紀元(1811 A.D.)其後孫が魯認の事蹟を述べて褒旌を請ひし文と魯認の傳記行狀、明人が魯認に贈りし書など殆んど其全部を占めたり。尤も卷四は魯認が神宗皇帝に上りし疏と啓とを收むれど、一陪臣にして位卑き彼が、皇帝に疏を上るが如き事なかるべきを以て甚だ疑ふべきものなり。要するに、本書は純祖王の時、魯認の子孫が其褒旌を得んがため捏造せし形跡あり。

77 眉叟記言

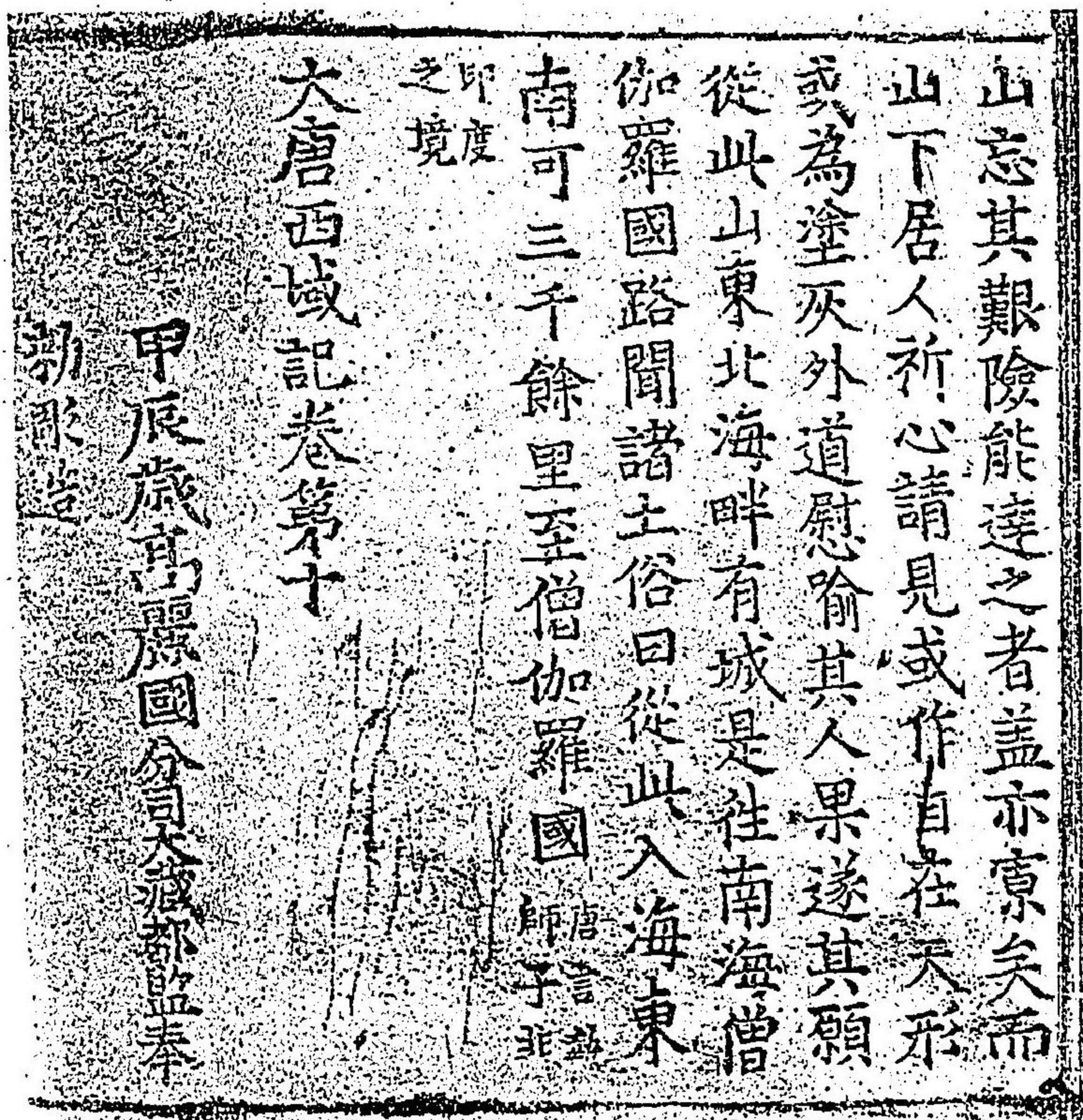
二十二册

版本

許

穆

許穆の文集なり。許穆は眉叟と號し、孝宗王元年(1650 A.D.)五十八歳にて初仕し、肅



宗王の時右議政に到りし南人の一領袖なり。本書原集六十七卷、續集二十五卷あり、原集は顯宗王十五年甲寅(1074 A.D.)以前の作文にして、續集は其以後のものなり。文集中東人系統の人々の墓誌銘等數多ありて、宣祖王以後顯宗王代に至る人物の傳記調査には必要の書なり。

宗教類

78 大唐西域記

十二卷 四册

甲辰歲高麗國分司大藏都監奉勅雕造

79 佛說雜譬喻經

二卷 一册

乙巳歲高麗國大藏都監奉勅雕造

80 妙法蓮華經

七卷 三册

癸卯歲高麗國大藏都監奉勅雕造

慶尙道陝川地伽耶山海印寺に傳來せる藏經高麗板を新印せるものにして、海印寺古籍に「海印寺新羅哀莊王時名僧順應所建也高麗文宗時藏大藏板我惠莊王戊寅重修板開又印其經文焉」と見ゆ。世宗王(1419-A.D.)申叔舟等に命じ、五十部を印行して全國の名山巨刹に頒たしめしとき、紙八十萬八千九百餘帖を要し、役糧五千石に



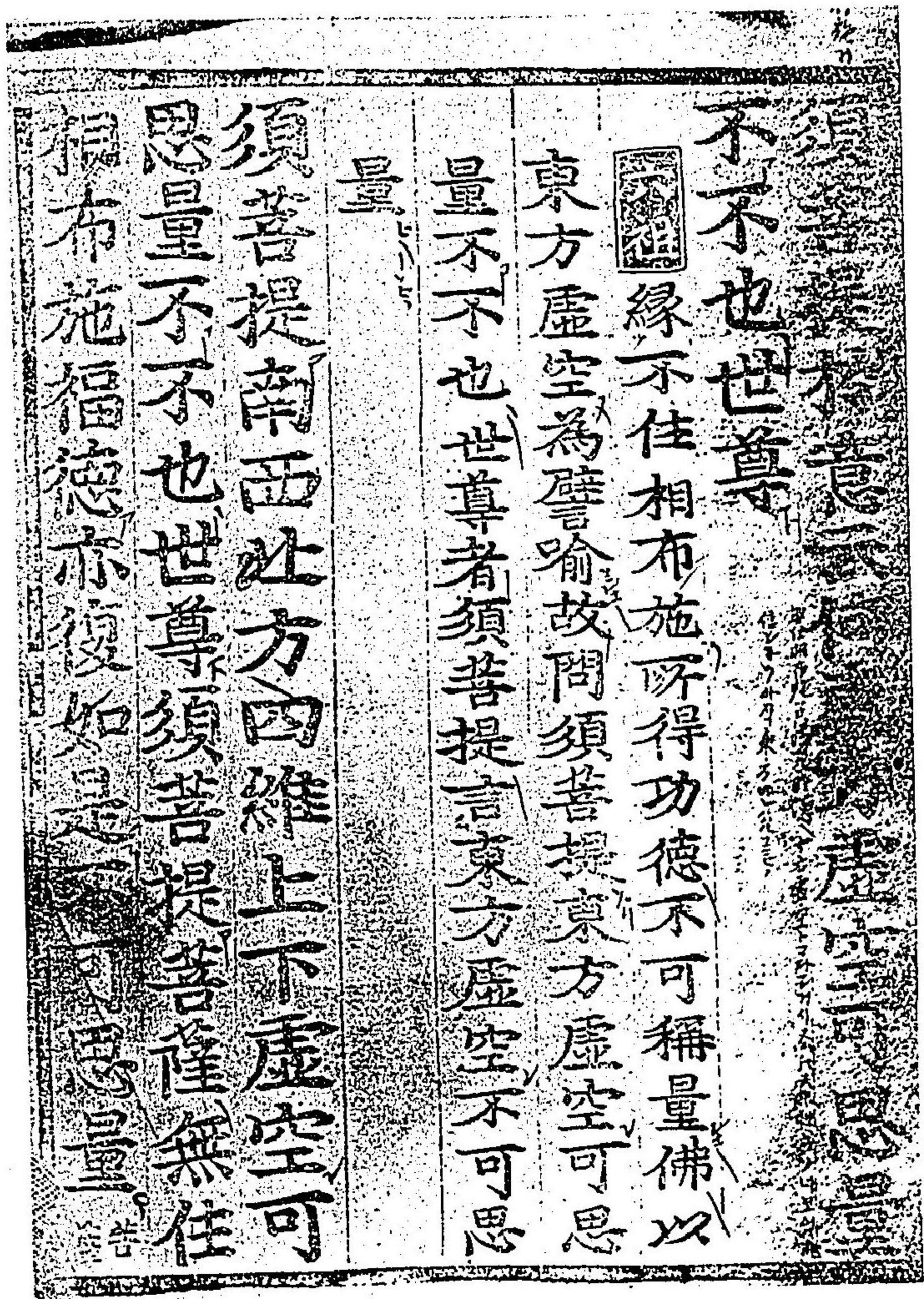
上りさといふ。芝増上寺の藏する所謂高麗本は、蓋し此時の版なるべし。

81 佛頂心陀羅尼經諸眞言集

一册 版本

諸種の随羅尼を集め、これを梵漢諺三文にて對照せるものなり。卷首に諺本と題して諺文の組織を説明せるを見るに、フ(其役)、口(肩音)、○(異疑)、ヲ(筆)、三(治)、立(皮)、ス(之)、エ(齒)、△(而)、○(伊)、古(尿)等各字に命名せること、一を不用終聲「一」を只用中聲」と定めたること、○字之音動鼻作聲、○字之音發爲喉中輕虛之聲而已」と解して、○○二音の別を説きたること、凡字音高低皆以字傍點之有無多少爲準平聲無點上聲二點去聲入聲皆一點として規定したる四聲の別は、諺文公表の當時に於けるものと相違あること等、参考とすべきもの頗る多し。また其綴字法も現行のものと同趣を異にし、總て標音的なること龍飛御天歌等の古書に見ゆるものと全く同一なり。

卷尾に前江原總攝兼洛山寺住持松溪堂道源の跋文ありて、順治十五年戊戌(1658 A.D.)六月下澣日江原道襄陽都護府地雪岳山神興寺重刊とあり。本書は朝鮮の佛徒間に廣く行はれたるものと見え、異本數種あり。クラーンの書籍目錄にも、乾隆四十二年(1777 A.D.)全羅左道羅漢山萬淵寺重刊本、及び巴理東洋語學校所藏刊本の外、寫本



數種を載せられたれど、刊本中にはこの神興寺版最も古し。本書は諺文と梵字との關係等を調査するに有用なる資料なり。明治四十三年冬朝鮮再遊の際、菊池謙讓氏の寄贈せられたるもの。

82 眞言集 一册 寫本

凡例に海東沙門龍巖增肅校對と見ゆ。クーランの書籍目録中に載せたる乾隆四十二年本なるべし。

83 金剛般若波羅蜜經 二册 版本

本書は金剛經を雙林傳大士六祖大鑒禪師圭峯密禪師治父川禪師豫章鏡禪師五家の解註したるものにして、全部訓點に吏道を書き入れたるは珍とすべし。康熙四年(1665 A.D.)全羅道靈鷲山興國寺刊。

84 佛說千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無碍大悲心陀羅尼經 一册 版本

乾隆十一年(1746 A.D.)日高山雲門寺刊。卷尾の陀羅尼には諺文にて發音を附し、本

文には吏道にて送假字を書き入れたり。

85 佛説大報父母恩重經

佛説長壽滅罪護諸童子陀羅尼經

合二册 版本

嘉慶元年(1796 A.D.)揚州天寶山佛巖寺版。卷尾なる佛説壽生經抄には諺文にて發音を附したり。

86 文昌帝君孝經

一册 版本

道經の經典にして南宮聖帝(張亞)の教訓を集めたるもの。肇基生子保護教育同業體志盡孝推行恒性等の十八章に分ち本文を漢文にて記し次にこれを諺譯したり。光緒十年(1884 A.D.)版。

87 關聖帝君明聖經

一册 版本

道教の經典關聖帝君(關羽)の教訓を集めたるもの。漢文にて記しその音讀訓義を諺文にて添へたり。光緒十二年(1886 A.D.)版。

88 金剛般若波羅蜜經

一册 版本

刊行の年代不詳。全部諺文にて發音を附したり。

叢書類

89 芝峯類說

四冊(六冊缺) 版本

宣祖王代(1568 A.D.)の名臣李暉光の著にして、綱を天文、時令、災異、地理、諸國、君道、兵政、官職、儒道、經書、文字、文章、人物、性行、身形、語言、人事、雜事、技藝、外道、宮室、服用、食物、卉木、禽虫とし、更に目を分ち、其下に説を誌せり。其説總て三千四百三十五條、其出處あるものにはこれを記せり。引用書籍は經書、文集、漫筆の類、凡そ三百五十種あり。記事中には支那のこと多けれども、朝鮮のことも少からず。

90 大東韻玉

二十冊

版本

李退溪の門人權文海號草澗の著すところ、陰時夫の韻府群玉に倣ひ、百七韻の下に





廣く朝鮮に關する古今の事蹟を網羅せり。蓋し上下舉つて支那の史籍をのみ喜
び、東國の事茫然として知るべからざるを慨せるなり。淨寫本三部の内の一は、同
門の金誠一(號鶴峯)これを宣祖王に進めしが、梓いまだならずして文祿の役あり、今
一つは鄭述(號寒岡)の手に失はれ、殘の一本僅かに存して、文海七世の孫によりて刊
行せらる。

91 旬五志

一册

寫本

洪于海

金得臣の序あり、顯宗王代(1660—A.D.)の著作なるべし。撰録のため日を得ること
僅に十有五、故に旬五と名けたりといへば、もとより博く涉獵せしものにあらず、れ
ども、別號俗諺歌曲等に於て見るべきもの少からず。

92 東國文献備考

百卷 四十册 版本

朝鮮の制度、典故を誌せる書なり。英祖王(1725 A.D.)の時、洪鳳溪等王命を奉じて撰
し、馬端臨の文献通考に倣ひて、稍其規を改め、目を象緯考輿地考禮考樂考兵考刑考
田賦考財用考戸口考市糴考選舉考學校考職官考に分ちて記述せり。李朝の制度

文物を見るには缺くべからざる書なり。此書其後純祖王の時補續成り、近年更に増補改訂せられたり。本書は英祖王時の初版本なるが故に、最も尊重すべし。

93 攷事新書

十五卷 七册 版本

英祖王四十七年辛卯(1771 A.D.)相臣金陽澤が徐命膺鄭忠彦等に命じて撰ばしめたる書にして、範を魚叔權の攷事撮要にとり、更に記事を詳精にし、官人日常の便覽に資せるものなり。本書門を天道地理紀年典章儀禮行人文藝武備農圃牧養日用醫藥の十二に分ち、之を十五卷とし、各門の下に或は典故或は方法を記せり。舊朝鮮の文化國情を知らんがためには必讀すべき書なり。

94 國朝彙言

二十二卷 十册 寫本

門を君道臣道吏部戸部禮部兵部刑部工部の九門に分ち、各門を更に十數の目に細別し、百數種の朝鮮書籍より、其目に相當せる記事を鈔出類輯し、各項に其出典を注せり。李朝の典故を知るに有益なる書なり。正祖王代(1777—A.D.)の著ならん。

95 增補山林經濟

十六卷 十一册 寫本

山林に農耕する士人用の百科全書とも稱す可き書なり。篇を下居治農種樹養花養蠶養牧治圃攝生種德治膳救荒家政求嗣救急四時纂要雜方基經筆訣山野樂に分ちて詳述し、これに李重煥の東國山水録を附せり。用意周到なる著述といふべし。著者は柳重臨なりともいひ、朴世堂ともいへど不明なり。東國山水録を附せるより推せば、正祖王(1777—A.D.)以後の書なり。

96 儒脣必知

一册 版本

本書は請願書告訴狀諸種の證券等の書式を示せるものにして、目を上言擊錚原情所志類單子類告目類文券類通文套に分てり。本書は舊朝鮮の民俗を知るに有益の書なり。孝子節婦の旌閭が其子孫の請願を俟ちて行はるゝが如き、妻賣渡文券の式の如き、頗る参考の價值あり。附録に吏頭彙編あり。

年丙申	年丁酉	年戊戌	一
年丙申	年丁酉	年戊戌	二
年丙申	年丁酉	年戊戌	三
年丙申	年丁酉	年戊戌	四
年丙申	年丁酉	年戊戌	五
年丙申	年丁酉	年戊戌	六
年丙申	年丁酉	年戊戌	七
年丙申	年丁酉	年戊戌	八
年丙申	年丁酉	年戊戌	九
年丙申	年丁酉	年戊戌	十

庚午運七
百六十年
十二世〇三

人物始めて生ずとし己巳會辛酉運より以下一運十二世三百六十年の干支を盡く
 擧げて支那朝鮮の歴史上の著しき事實を註せるもの。初、洪啓禧の編せし經世指
 掌ありしが、一運の干支にのみ詳しくして、一世の甲子に略なりしが故に、英祖王五
 十年(1774A.D.)更らに徐命膺に命じて本書を撰述せしめたり。

100 深衣攷證

坤二册 寫本

全四卷の内卷三卷四の兩卷を存す。深衣に就いて攷證せる書にして、卷三は衣裳
 裁製衣制、裳制の篇あり。經書政書等に據りて其名稱を攷證し、これに著者の私按
 を附し、圖解を挿めり。卷四は附錄諸致にして、他の衣服の攷證あり。圖解私按を
 附すること前卷に同じ。

本書は按文中に、萬斯同(乾隆四十年歿)徐乾學(乾隆三十年歿)の名を擧げ、皆清初人と註せるより
 推せば、正祖王末年以後の書なり。

101 貞觀政要

十卷 六册 版本

唐の吳兢が撰びし貞觀政要を翻刻せるものなり。英祖正祖頃の官板なるべし。

石珍斷指朝本



五倫行實圖

卷一

孝子

五

102

五倫行實

五卷 四册 版本

孝子忠臣烈女朋友師生の事蹟を圖すること凡百五十、一々漢文と諺文にて事實を紀し詩と贊とを添へたり。初、世宗王の十三年(1514A.D.)に三綱行實、中宗王の十三年(1518A.D.)に二倫行實刊行せられたるを、正祖王の二十一年(1797A.D.)に至り、集成して五倫行實となし、哲宗王の十年(1859A.D.)更らにこれを重刊せるなり。

103

啓蒙編諺解

一册 版本

漢文にて簡易に天地間の現象、人道の大倫等を説き、諺文にて其音讀訓義を添へたるもの。著者年代ともに不詳。

104

禮辯彙節

三卷 三册 寫本

冠婚葬祭の四禮に就きて、鄭述(寒岡)、金長生(沙溪)、朴世采(玄石)、宋時烈(尤菴)、李滉(退溪)、尹宜舉(魯西)等の説を類輯せるものなり。

105 海印寺古籍

一册 版本

朝鮮名刹の一たる海印寺にて刊行せるもの。其縁起、大藏經開刊由來、海印寺善安住院壁記、海印寺事蹟碑、其他海印寺所藏の文書を收録せるものなり。海印寺の研究は先づ此書に據らざるべからず。冊板に古き部分と新に添加せしものとありて其最も新しき記事は先王十一年甲戌明治七年に及べり。

106 西序書目

一册 寫本

奎章閣西序の書籍目録なり。

107 雅言覺非

一册 寫本

故事語原等を述べたるもの。小引に嘉慶己卯(1819 A.D.)冬鐵馬山樵書とあれど、まだその何人たるを知らず。

108 東事原

一册 寫本

故事出典語原等を述べたるもの。著者は申其永その年代詳ならず。

乙巳定難記一本	本朝	柳希春
眉巖日記四本	本朝	柳希春
燕行聞見錄一本	日本	菅野真道
續日本紀十五本	日本	藤原緒嗣
日本逸史十一本	本朝	申叔舟
海東諸國記一本	本朝	申叔舟
奉使日本時聞見錄二本	本朝	申叔舟
右雜史類	本朝	朱子
宋名臣言行錄二部	本朝	朱子
一部二十四本	本朝	朱子
海東名臣言行錄九本	本朝	金堉

109 古今法語

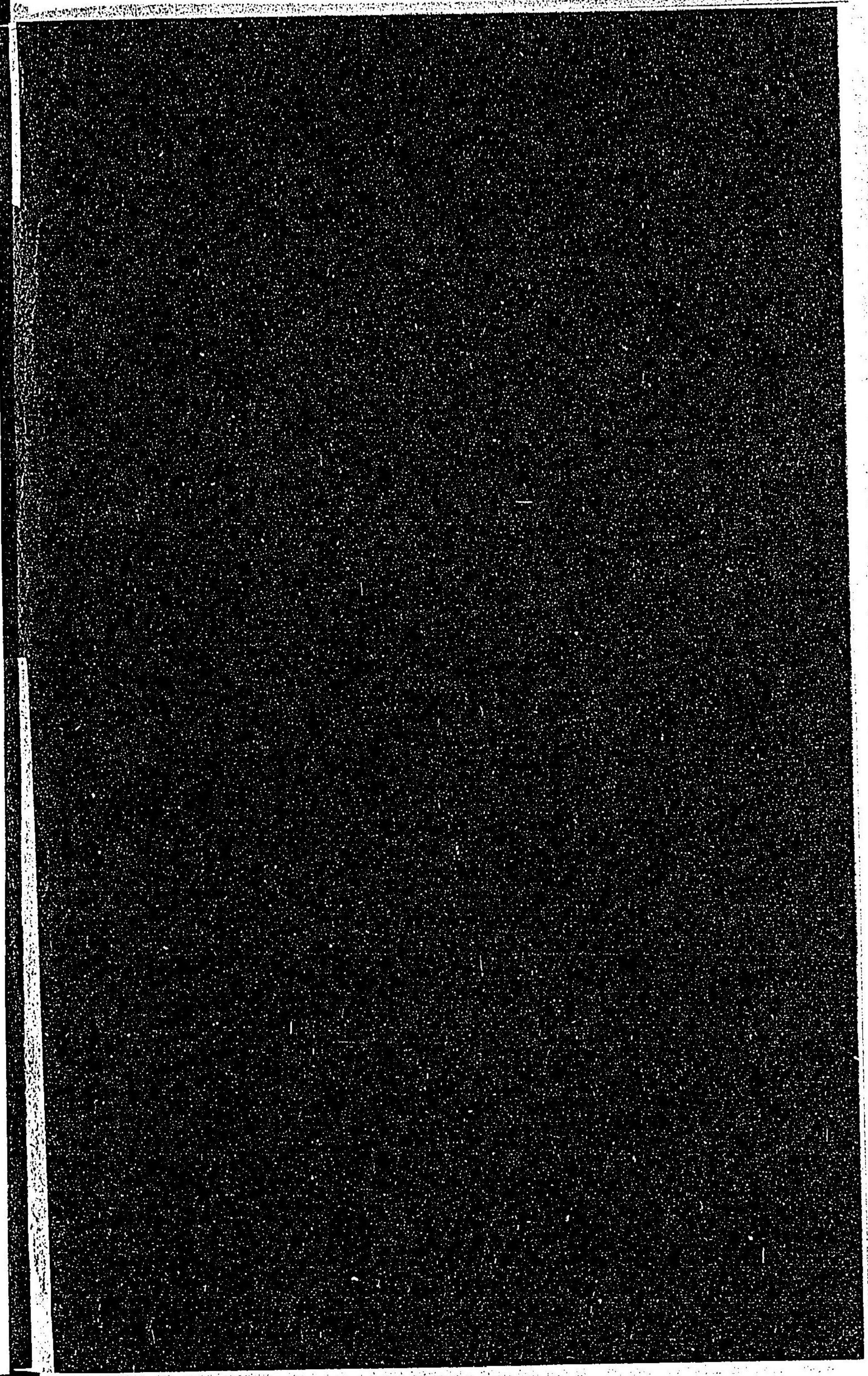
四卷 二册 寫本

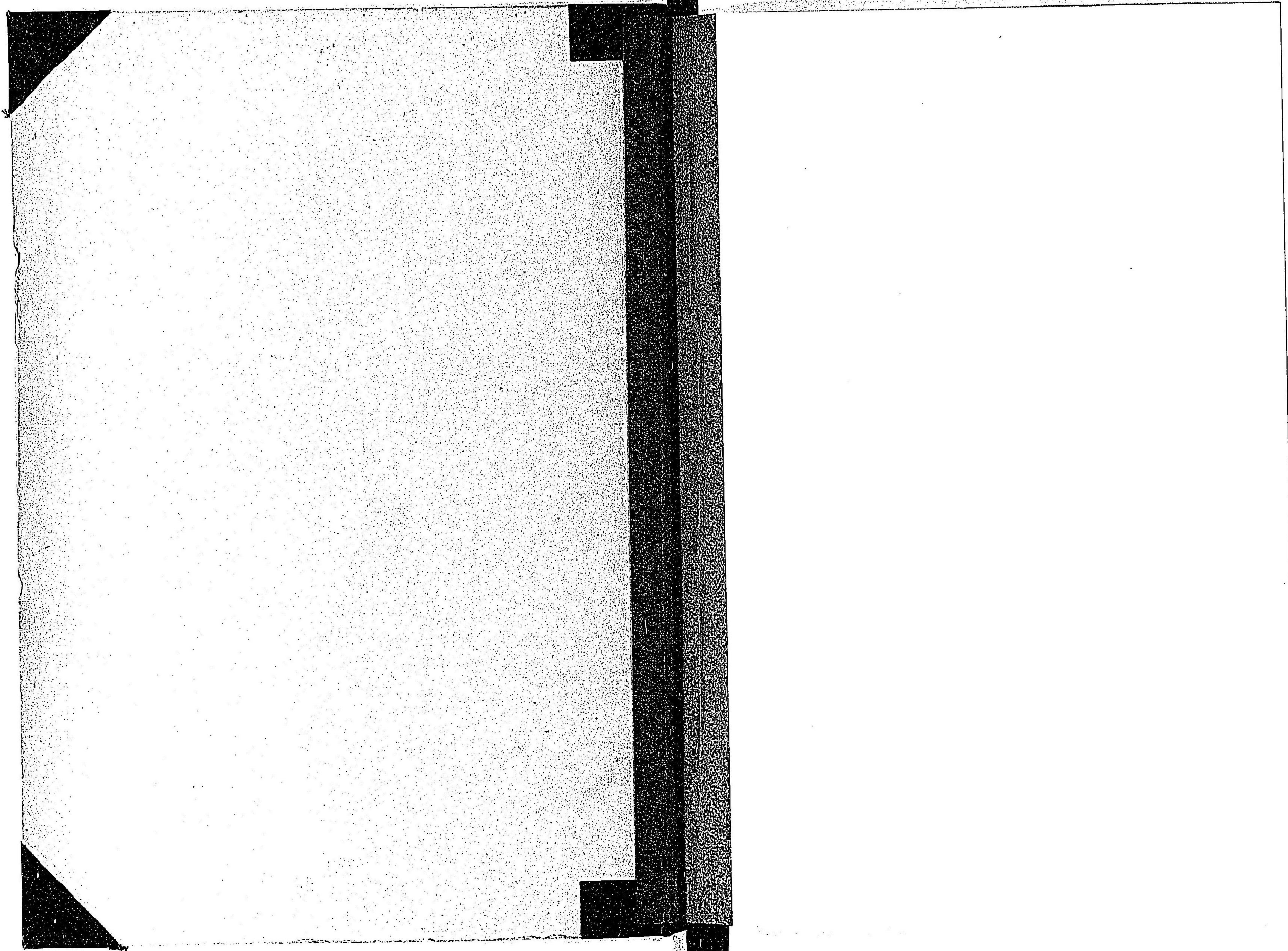
兼山齋劉在建の著とあり。記事を二十項に類別し、三十種の子類と二種の文集とより格言を鈔出して類輯せり。菜根譚には清洪自成著と註せり。思ふに正祖王(1777-1814)以後の書ならむ。

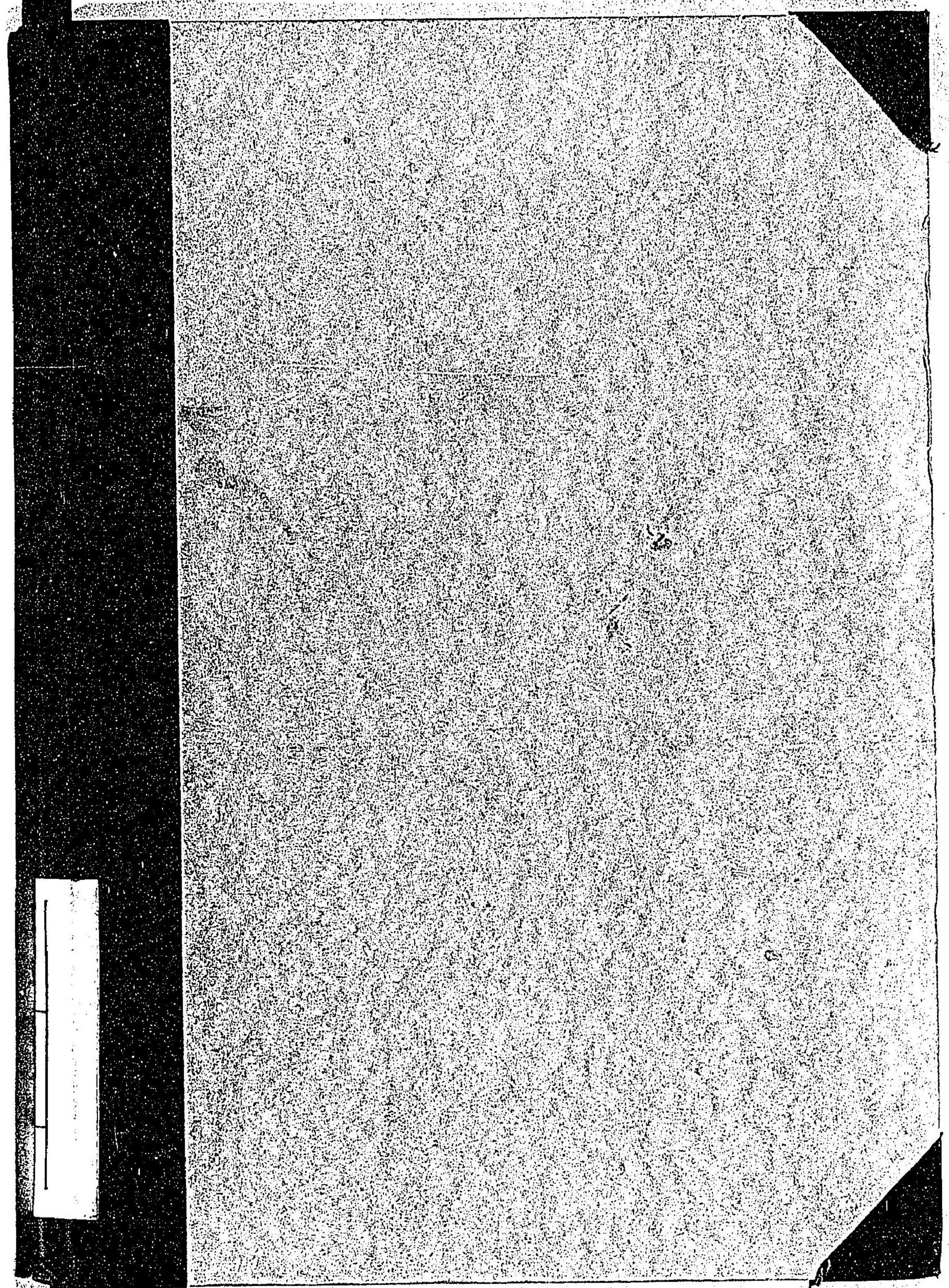
110 古今名喩

一册 寫本

支那の諸子類より名喩の章句を類集せし書なり。作文の資料とせしものならむ。







025.21

Ka373t

朝鮮書籍目録

国立国会図書館

101567-000-1

025.21-Ka373t

朝鮮書籍目録

金沢 庄三郎/編

M44序

EAB-0054



